

第1回シンポジウム「洋上風力発電とステークホルダーマネージメント」を開催

●地球水循環研究センター

地球水循環研究センター洋上風力利用マネージメント寄附研究部門は、6月24日(月)、ES総合館ES会議室において、第1回シンポジウム「洋上風力発電とステークホルダーマネージメント」を開催しました。

同センター寄附研究部門は、産学連携による洋上風力発電の事業化を目指し、わが国で初めてステークホルダーマ



シンポジウムの様子

ネージメント学を研究する研究部門として、4月に設置されました。同部門は、当学問領域の社会的な存在意義や具体的な事業との関わりについて、一般の方々や専門家から理解と協力を仰ぐために、年に2回の頻度でシンポジウムを開催する予定です。その1回目となる今回は、学内外合わせて約40名が参加しました。

初めに安田公昭同センター寄附研究部門教授があいさつをし、上田博同センター教授が「洋上風力と気象学のかかりについて」と題し、洋上風況観測システムの実証研究に関する紹介、次いで、本巢芽美同部門助教から「陸上風力発電と受容性」と題し、風力発電の導入問題と地域住民からの受容性に関する調査の紹介があり、安田教授が「洋上風力とステークホルダーマネージメント論」と題して、漁業権の発生や漁村社会の変遷などの解説及び歴史的経緯から現在の漁業権のしくみを説明しました。

質疑では、洋上風力の先進国である欧州と日本の漁業権の相違点や漁業補償の法的根拠など、実際の事業を想定した具体的な質問があり、熱心な討議が行われました。第2回目のシンポジウムは今年12月に開催予定です。

減災連携研究センターシンポジウムを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、7月12日(金)、ES総合館ESホールにおいて、減災連携研究センターシンポジウム～「減災連携研究」の展望～を開催しました。シンポジウムでは、同センターで行った平成24年度の取り組み、研究成果を発表するとともに、今後の研究や活動をより良いものとするためのディスカッションが行われ、約180名が参加



パネルディスカッションの様子

しました。野田減災連携研究センター副センター長の開会あいさつの後、第1部では、福和減災連携研究センター長より、平成24年度の減災連携研究センターの取り組みについて発表がありました。第2部では、武村雅之同センター寄附研究部門教授のコーディネートのもと、専任教員6名が平成24年度の研究活動紹介を行いました。また発表に対する、今後の期待や要望について、会場からの意見を交えて議論が行われました。休憩時間には、現在建設中の「減災館(仮称)」の見学が行われ、今年度末完成に向けての工程と、防災・減災教育と減災研究の連携拠点施設になることの説明がありました。第3部では、隈本邦彦同センター客員教授をコーディネータに、客員教授4名、社会連携推進会議委員2名、兼任教員3名をパネリストに迎えて、ディスカッションが行われました。同センターのこれまでの活動についての感想や、南海トラフ巨大地震に立ち向かうために果たすべき役割・期待について、様々な立場から活発な議論が行われました。最後に、曾根同センター副センター長から閉会のあいさつがありました。

第91回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、6月18日(火)、環境総合館レクチャーホールにおいて、第91回防災アカデミーを開催しました。今回は、桶田 敦 TBS テレビ放送局解説委員による「防災機関としてのテレビの役割」と題した講演が行われ、95名の参加がありました。

講演では、初めに、リスクコミュニケーションの立場か



講演する桶田氏

ら、テレビが防災機関としてどのような役割を果たすかについて説明され、続いて東日本大震災の実例に基づき、観測情報として津波の第一波の高さをそのまま伝えたことへの様々な議論について紹介されました。

その後、事前の警鐘番組の例として、平成17年に放映されたテレビ映像が紹介され、東日本大震災以前の宮古市田老地区の取り組みや、避難の重要性などを説明した当時の映像をもとに、事前や事後で報道機関として何ができるのかについての説明がありました。

最後に、独自の防災訓練の様子や、緊急時における第一報の流し方について映像で詳しく説明されました。

参加者からは講演内容を踏まえ、テレビ局の安全性やメディアへの要求について活発な質疑応答が行われました。

博物館で落語会を開催

●博物館

博物館では、6月29日(土)、落語会「名大博物館で落語を聴こう！」を開催しました。これは、同館で3月25日(月)から7月20日(土)まで開催されていた第17回特別展「くじら クジラ 鯨」の関連企画として、開催されたものです。同展では、平成21年春に名古屋港に流れついたマッコウクジラの死体から4年間かけて作った全身骨格標本をはじめ



落語会の様子

クジラに関わるさまざまな資料を展示しました。

落語会は、上方落語の桂九雀さんが、特別展の内容にちなんで新作落語「鯨医者」を演じました。「鯨医者」では、往診に出かけようと航海中に鯨に飲み込まれてしまった医者が、持っていた薬(下剤)を鯨の腹の中でパラパラとまきます。鯨は下痢を起こし、そのおかげでめでたく鯨の腹から脱出できるというお話です。

続いて、博物館の教員による「『鯨医者』に出てくるように鯨が人を飲み込むことはほんとうに可能なのか?」についての解説が行われました。これまでに人が丸ごと鯨に飲み込まれたという確実な証拠はないが、食道の大きさなどから見て、マッコウクジラなら可能かもしれないとの説明がありました。最後に、古典落語の「はてなの茶碗」が演じられ、生演奏のお囃子も入りました。

展示室内に高座を設けての落語会は、博物館として初めての試みでしたが、約270名もの来場者があり大歓声がありました。2階展示室、3階展示室に用意した席は満席となり、立ち見も出るほど盛況でした。